英語教育

コアスクール（英語教育）　県立三島北高等学校

平成30年10月

（平成30年５月指定）

＜１　テーマ＞

「「英語でやりとりする力」を伸長させる指導法・評価法、体制づくりに向けて」

＜２　取組方法＞

・英語コアスクールＷＧの設置
（生徒の学力向上）
・Proficiency Testの実施
・TOEFL iBT対策講座の実施
・Empowerment Programの実施
・高校生英語プレゼン大会の実施
（教員の指導力向上）
・「やりとり」を主眼とした学習活動の実施
・「やりとりする力」を育成する教材の開発
・検定対策講座の受講
（高大接続改革）
・外部検定を活用する大学入試の情報整理
・英語教育改革に取り組む大学等の視察
（成果の検証）
・過年度データとの比較及び教材・評価法のマニュアル化
（その他）
・オンライン交流の研究
・保護者の講座参観

＜３　成果指標と実績＞

成果指標	初期値	目標値	実績（評価）
①授業への取組２年	26.1%	30.0%	― ()
１年	32.4%	35.0%	― ()
①平日学習時間２年	1.41h	1.50h	― ()
１年	1.44h	1.50h	― ()
①休日学習時間２年	2.18h	2.30h	― ()
１年	2.20h	2.30h	― ()
③授業で力が　２年	6.3%	8.0%	― ()
ついた実感　１年	4.5%	6.0%	― ()
①英検準１級以上、TOEFL iBT、IELTS の受検者数（生徒・教員）	20 人	25 人	― ()
②海外研修への参加者数	22 人	25 人	― ()
②ｲﾝｸﾞﾘｯｼｭｷｬﾝﾌﾟへの参加者数	34 人	35 人	― ()
③①の検定試験でCEFR B2 に到達した生徒数	2 人	4 人	― ()
②言語機能重視 Speaking Test 回数/年	1 回	2 回	― ()
②各種検定講座の開催回数	0 回	1 回	1回（B）
③「英語でやりとりができる」実感	26%	30%	― ()
③CEFR C1 以上の英語担当教員	2 人	3 人	― ()

＜４　特徴的な取組＞

（１）　言語機能別スピーキング活動の計画及び実施

ア　授業内での言語機能別活動プログラムの開発

授業内での言語活動を通じて、生徒が発話量や文構造等を意識しつつ即興で発話する力をつけられるよう、「描写」「理由付け」「発問」等の言語機能別言語活動メニューを開発するとともに、評価基準の原案作成に取り組んだ。７月２日（月）及び８月29日（水）の事前担当者会議では、（株）アルクからスピーキングテストの評価官を招聘し、評価官による講義や評価方法に関するディスカッションを行い、発問や評価方法の工夫等に関して学ぶ貴重な機会となった。

【参加者】１・２年部英語科教員６名、アルク担当者２名、管理職

【内　容】言語機能とその評価に関する講義
本校における学習活動及びテスト実施に関する協議
授業内での言語活動で使用するタスクの確認
言語活動及びテストの評価観点に関する協議
Proficiency Test実施時の具体的課題に関する協議
ワークシート原案作成

イ 授業内でのSpeaking帯活動の実施

担当者会議で作成した言語機能別ワークシートを活用し、１年生のCommunication English Ⅰの授業内で、５分間のSpeaking活動を毎回実施し、英語による質問・応答及び簡単な自己評価をその場で行っている。

（生徒はWSを用いてペアで質問・応答の練習）

（支援が必要な生徒は、教員がサポート）

（２） 「世界へ羽ばたけ！三北TOEFL対策講座」

海外大学への進学、国内大学から協定先海外大学への留学、日本の大学入学者選抜等に活用されるTOEFL iBTの対策講座を行った。また、教員も講座を受講し、自らの英語力向上、指導力向上を目指した。

【実施日】平成30年８月９日（木）、10日（金）

【講　師】順天堂大学　山下　巖 教授　　静岡大学　矢野　淳 教授

【参加者】生徒１２名（３年生：５名、２年生：７名）、教員１０名（部分的な参加者も含む。）

※生徒は、英検２級以上取得の２・３年生を対象に募集

（矢野教授による語源等に着目した語彙解説）

（山下教授によるICT機器を活用した英作文講座）

【生徒アンケートより】

・TOEFLについて全然知らなかったので、今回はいろいろと聞けてよかった。単語について今まで何も考えずに覚えたりしていたので、少しでも法則が分かると文章理解にとても役立つと思った。また、発音についても話を聴けて苦手なSpeakingも頑張りたいと思った。

・TOEFL以外でも役立つような知識を知ることができた。みんなのレベルが高いので、刺激になった。先生の話がわかりやすかった。

（３） 海外教育機関等とのオンライン交流に関する研究

ＳＧＨベトナム研修（８月20日～24日に実施）期間中、研修先であるハノイ市の高校２校（Amsterdam High、Vin School）を訪問し、将来的に本校とのオンライン交流の可能性等に関して、現地の教員と協議を行った。

また、大学等の視察事業で訪問した立命館アジア太平洋大学との連携で、先方の留学生に依頼し、本校生徒のディベートやプレゼンに対してアドバイスをもらうオンライン講習会を実施した。

＜５　成果と今後の方向性＞

授業におけるSpeaking活動に関しては、２学期の開始当初より、生徒の発話量も増えており、一定の成果が見られる。ただし、発話の正確さ、速度、即興性等に関しては、まだまだ課題も見受けられる。12月実施予定の１年生全員を対象としたProficiency Testの結果を踏まえ、適切な評価を行い、より効果的な実践となるようプログラムに修正を加える必要がある。

年度末には、生徒たちが自発的に学んだ内容を英語で発表する「三北杯高校生英語プレゼン大会」も企画しており、主体的に学ぶ姿勢を一層伸長するような事業も企画していきたい。

コアスクール（英語教育）　県立吉原高等学校

平成 30 年 10 月
（平成 30 年５月指定）

１　テーマ

『グローカル人材』の育成
～英語４技能習得・異文化理解・地域貢献を通して～

２　取組方法

本校は普通科、国際科を擁する高校であり、地域に学び国際的に活躍できる『グローカル人材』の育成を推進している。また、学力向上のための家庭学習の習慣化、日本語・英語での表現力の向上に取り組むことを学校経営目標として掲げている。これらの目標を達成するために、
（１）大学入学共通テストに向けた英語４技能のバランスのとれた指導の工夫
（２）英語の家庭学習の習慣化と学習方法の確立による自律的学習者育成
（３）英語で発信しようとする態度の育成と発信力の向上に取り組みながら、英語４技能育成、異文化理解促進、地域貢献を通して『グローカル人材』を育成し、魅力ある学校づくりを実現していく。

３　成果指標と実績

成果指標	初期値	目標値
①授業への取組　２年・１年	23%・38%	40%・40%
①平日学習時間　２年・１年	0.9・1.3 時間	1.5・２時間
①休日学習時間　２年・１年	1.2・1.8時間	２・２時間
③授業で力がついた実感　２年・１年	６%・８%	10%　・　10%
①英語外部試験受験者数	英検　321人 TOEIC 40人	英検　330人 TOEIC 50人
②イングリッシュキャンプ参加者数	国際科１年全員	国際科１年全員 国際科１年全員
②海外研修への参加者数	国際科２年全員	国際科２年全員 国際科34/37人
③卒業時の英語検定２級以上合格者、TOEICスコア500点以上取得者数	英検　　52人 TOEIC　10人	英検　　60人 TOEIC　15人
①英語の家庭学習が確立した１年		60%
①オンラインで交流した生徒数		35人
②英語で地域貢献に参加した生徒数	14人	30人
③イングリッシュキャンプ参加者の英語学習への動機付けができた		イングリッシュキャンプ参加者の80%　100%
③海外研修参加者が英語で自己表現ができた		海外研修参加者の80%　97%
③オンライン交流でコミュニケーション力がついた		オンライン交流した生徒の60%
③エンパワーメントプログラムでコミュニケーション力がついた		プログラム参加者の80%

※赤字…実績

４　特徴的な取組

（１）４技能をバランスよく育成する授業改善

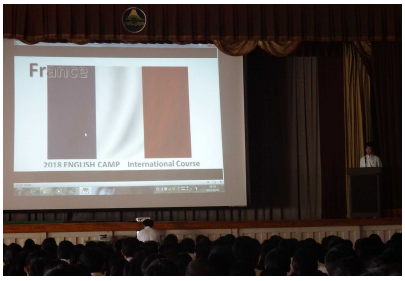
教科書を活用した４技能育成を目指し、ワークシート開発、言語活動の研究を進めている。授業改善アドバイザーとして静岡大学 学術院教育学領域 教育学部 亘理 陽一 准教授を招聘して研究授業、研究協議会を10月と１月に開催。

（2）外部講師によるＴＯＥＩＣ講座

希望者対象に放課後週１回２時間のTOEIC講座を開講。５回、計１０時間の講座を実施し、TOEIC受検につなげ、英語学習への動機付けとする。

（3）異文化理解のための研修・交流と異文化理解発表会

イングリッシュキャンプ、オーストラリア研修、姉妹校の台湾馬公高校との交流、モンゴル高校生交流等での異文化理解・交流体験を生徒がパワーポイントなどにまとめ、発表。プゼンテーション能力の向上を目指すとともに異文化理解の大切さを全校生徒・地域へ発信。



（4）英語など他言語を使った地域貢献

国際科の生徒が中心になって、英語やその他の言語を使って、ボランティア活動に参加。異文化理解や地域貢献を体験するとともに、学習への動機付けとする。

（5）その他の取組

- 授業外での多読、多聴プログラムの研究と実施 … 授業外で読んだり聴いたりして、その成果をクラウドサービス(Classi)に記録、可視化し、自ら英語を学習するモチベーションを高めるプログラムを研究。
- ＩCTを活用した授業の研究と実施 … プロジェクターやi-pad等を効果的に使い、「英語の４技能育成」と「主体的・対話的で深い学び」を可能にする授業を研究、11月にＩＣＴ活用研修会を開催。
- エンパワーメントプログラム … 海外の大学生がリーダーとなって実施する英語の表現力を付けるプログラムを12月に希望者30名の参加で実施。
- 海外とのオンライン交流 … オーストラリアの高校生とスカイプを利用したオンライン交流を11月から実施する。校内回線で安定した通信をするためには限られた台数のパソコンしか使えない中で、いかに効果的に交流し、生徒の異文化理解やコミュニケーション能力向上、そして英語学習への動機付けに役立てるかを研究。

5　成果と今後の方向性

コアスクールの取組がスタートして半年、顕著な成果と言えるものは多くないが、研修に参加した生徒たちの達成感や英語学習への動機付けの効果は高い。今後、グローカル人材育成の３つの柱「英語４技能習得」「異文化理解」「地域貢献」の研究をさらに進めていきたい。その中でも、４技能の育成のために授業をいかに変えていくか、そして、授業外で異文化を体験したい、英語をもっと学びたいという生徒たちの意欲をいかに喚起して、そのための場や機会をどのように作るが課題である。

コアスクール（英語教育）県立富士宮西高等学校

平成 30 年 10 月
（平成 30 年 5 月指定）

＜1　テーマ＞

「大学入学共通テスト」とICT環境に対応した
英語4技能の養成とグローバル人材の育成

＜2　取組方法＞

生徒の学力向上

(1) ソフトを使用した英検対策補講の実施
(2) 異文化交流会の実施。海外研修の推奨
(3) 実用英語技能検定の実施と面接練習
(4) ＧＴＥＣの実施
(5) Skypeを使用した国際交流を実施するための環境整備
(6) English Campの実施
(7)「放課後読書」の実践

教員の指導力向上

(8) ４技能養成テキストの授業法研修会の実施
(9) ４技能養成教育ソフトの授業での利用法の研究
(10) 次期学習指導要領に対応した先進高校の視察
(11) 大学教授による授業参観と指導助言
(12) 小中高等学校での英語授業参観交流
(13) 授業改善のための外部講習会への参加
(14) デジタルテキストやＩＣＴ機器の利用研究

高大接続改革

(15) 「大学入学共通テスト」への対応の研究

＜3　成果指標　平成 30 年度＞

成果指標	初期値	目標値
①授業への取組 2 年 1 年	45.1% 40.6%	46% 42%
①平日学習時間 2 年 1 年	1.6h 1.8h	1.8h 1.8h
①休日学習時間 2 年 1 年	2.5h 2.6h	2.6h 2.8h
③授業で力が　2 年 ついた実感　1 年	4.2% 4.1%	5.0% 4.5%
①英検 2 級の受検者数	90 人	120 人
②海外研修への参加者数	1 人	3 人
②ｲﾝｸﾞﾘｯｼｭｷｬﾝﾌﾟへの参加者数	0 人	20 人
③英検 2 級の合格者数	30 人	40 人
②GTEC 4 技能検定 960～・690～	－	10% 30%
③異文化交流会の参加者数	0 人	10 人
②ＩＣＴ利用の英語授業実施教員数	3 人 (38%)	4 人 (57%)
③ＩＣＴ授業で力がついた実感（生徒）	－	50%

＜4　特徴的な取組＞

教員の指導力向上

(1) 文部科学省による「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」の研修協力校に指定され、校内研究協議会等を実施し、敬愛大学の向後秀明教授の指導助言を受けて、授業改善を行っている。この事業において、同じ地区の研修協力校である富士宮市立富丘小学校、富士宮市立第四中学校と、英語の公開授業を参観し合い、その後研修会を行って、得たものを授業改善に活かしている。　→

(2) 新学習指導要領に対応した教科指導が行われている先進高校である東京都立両国高等学校、京都市立日吉ケ丘高等学校を視察し、その指導法を英語科の中で共有した。↓

京都市立日吉ケ丘高等学校視察

向後教授を招いての研究授業

校内研究協議会で教授の指導助言を受ける

生徒の学力向上

（1） 本校を準会場として英検を実施。受検者を対象に、平日放課後にパソコン室で、**英検対策ソフト「スタディーギア」を使用した英検対策補講**を行っている。また、1次試験合格者には個別の面接練習を行っている。これらの取組は、英検受検者数の増加 （第1回47人、第2回91人）という結果に現れつつある。

スタディギアを使用した英検対策補講

1次試験合格者への個別の面接練習

（2） **海外研修の情報を積極的に提供**しており、米国サンタモニカ1名参加、サクラメント1名参加、モンゴルドルノゴビ県1名参加（9名応募）、韓国済州（1名応募）など、留学生への応募と参加が飛躍的に増えた。 また、「総合的な学習の時間」において、**交換留学生との異文化交流会**を持った。→

（3） 英語で書かれた易しい本を約400冊購入し、**英語読書マラソン**として、ひと月に読む語数を指定し、1,2年生を中心に好きな本を読ませる取組を実施している。↓

米国サンタモニカへの留学

英書を多読する「英語読書マラソン」

交換留学生との異文化交流会

（4） その他

・Skypeを利用した国際交流。→Skypeができる環境を整備。
・English Campを12月（ALT4名参加）と3月に実施予定。
・家庭部の活動にALT参加。「ALTを和菓子でおもてなしをする」をテーマに、和菓子の説明とレシピを英語で作成し、実際に英会話をしながら、調理、試食をともに楽しんだ（10/20）。
・4技能養成テキストを使った有効な授業法についての研修会を実施。4月、5月　Macmillan社、6月　Oxford社
・4技能養成教育ソフト「e-spire」の実践校である鎌倉学園高等学校（神奈川県）を12/3に訪問予定。
・予備校等が主催する授業作りの講座や授業力向上講座へ参加した（8/7、8/21）。
・日々の授業で、デジタルテキストやICT機器を使用し、効果的な利用法を研究している。
・「大学入学共通テスト」対策の外部のシンポジウム等に参加した（8/8）。

＜5　成果と今後の方向性＞

平成30年度は、コアスクール（英語教育）と「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」研修協力校という2つの指定を受け、「英語の宮西」をスローガンに、全校体制で英語力の向上と学校の活性化・魅力化に取り組んでいる。2つの指定校ともまだ始まったばかりであり、成果は今後少しずつ現れてくるものと思われる。国際科や英語科のある学校とは異なり、1からのスタートのため、基礎作りに膨大な労力がかかるが、更に研究を進め、31年度には一定の成果を出して行きたい。

コアスクール（英語教育）　県立掛川西高等学校

平成30年10月

（平成30年５月指定）

＜１　テーマ＞

Gotta Get Global, KAKENISHI!
～Learn from the world around you～

＜２　取組方法＞

①【生徒の学力向上】
・海外修学旅行（台湾）における現地大学生との班別活動を行う。
・「エンパワーメントプログラム」（校内イングリッシュキャンプ）を実施する。
・英語ディベート学習会を実施する。
・Google for Education等を活用した海外の高校とのオンライン交流を行う。
・多読活動等を通じて生徒の英語運用能力及び学力を向上させる。

②【教員の指導力向上】
先進的な英語指導実践校への視察や、英語教員向け研修への参加により、英語担当教員の４技能５領域指導力を向上させる。

③【高大接続改革】
英語授業で海外のコースブック（OXFORD "*Q:Skills for Success*"）の活用により、大学入学共通テスト（英語）及び民間の資格・検定試験に対応する授業の実践について、更なる研究と実践を行う。

＜３　成果指標と実績＞

成果指標	初期値	目標値	実績（評価）
①授業への取組２年 １年	28.0% 33.1%	30% 35%	() ()
①平日学習時間２年 １年	100.6分 90.8分	105分 95分	() ()
①休日学習時間２年 １年	149.1分 131.2分	155分 135分	() ()
③授業で力が　２年 ついた実感　１年	8.4% 6.8%	10% 8%	() ()
①学校が指定する外部検定試験の受験者数	152人	160人	()
②海外研修（修学旅行は除く。）への参加者数	17人	20人	()
②イングリッシュキャンプへの参加者数	30人	40人	29人 (B)
③学校が指定する外部検定試験の合格者数	70人	75人	()
②校内海外研修報告会への参加生徒数（発表者を含む。）	20人	30人	57人 (A)
大学入学共通テスト（外部検定試験）に対応した副教材等の製作	なし	30%	()
③生徒が英語で言語活動をしている１単位時間内の平均割合	53%	55%	()
③英語担当教員が英語で発話をしている１単位時間内の平均割合	54%	60%	()

＜５　成果と今後の方向性＞

生徒の学力を向上させるためには、生徒への動機付けが最重要であると考える。
全ての生徒が関わる教科の学習活動や学校行事においては、「教員が」その内容を充実させ、指導の手法を工夫することはもちろん、「生徒が」自主的に関わりたくなるような仕掛けを工夫し、「生徒による」主体的な取組へと繋がる環境づくりも必要である。本校で展開している英語の授業によって、全ての生徒が4技能5領域をバランスよく身に付ける必要性を理解し、また台湾への修学旅行によって、全ての生徒が日本とは異なる文化に触れ、現地の人々とのコミュニケーションを経験できている。これらのことは、全ての生徒の視野を多少なりとも広げ、異なる視点や考え方から学ぶことへの気づきに繋がっている。英語力については、技能を身に付けながら、使える知識を増やすための指導について研究中である。
一方、英語によるコミュニケーションや異文化理解等に強い関心を持つ生徒に対して、より高いレベルでその能力を伸ばすことのできる機会を提供することも必要と考える。教員の業務量をあまり増やすことなく、質の高い取組を実施するため、「もっと英語を使えるようになりたい生徒」を「発掘」し、民間企業が提案するプログラムの導入や、行政機関との連携、外部指導者の活用等によって、彼らが少し高いハードルにチャレンジするための後押しを続けていきたい。

＜４　特徴的な取組＞

【台湾への修学旅行】10月10日(水)～14日（日） 現地の大学生との班別探究活動

台北市内を一緒に散策しながら、英語を中心に、漢字やジェスチャー等、あらゆるツールを駆使してコミュニケーションを図り、台湾の文化・社会への理解を深めた。地下鉄やバスの利用の仕方を習得することも目的の一つであった。

【校内イングリッシュキャンプ『エンパワーメントプログラム』】８月20日（月）～24日（金）

外国人学生をリーダーとする小グループで様々な活動やプロジェクトに取り組んだ。ディスカッションやプレゼンテーションを中心とした英語漬けの５日間を通じて、英語で自分を表現することや主体的に行動することなどを学んだ。

【校内・校外英語ディベート学習会】7/30、 8/29、9/1、9/15、10/20

論理的・批判的思考力を高めるとともに、11月に行われる高等学校英語ディベート県大会出場を目指し、外部の指導者を招いて学習と練習に取り組んでいる。９月には三島北高校との合同練習にも参加した。

【海外研修等報告会＆講話「留学ノススメ」】６月29日（金）、10月26日（金）

６月には、３月のアメリカ研修参加者が、また10月には、エンパワーメントプログラムや「ふじのくにグローバル人材育成基金」による支援を受けて海外研修を行った生徒等が、本校生徒や保護者の前で英語でプレゼンテーションを行った。10月には留学エージェントによる講話も実施し、イマドキの留学事情についてお話をいただいた。

コアスクール（英語教育）　県立浜松北高等学校

平成30年10月
（平成30年5月指定）

＜1　テーマ＞

グローバル社会における真のリーダーの育成を目指して

＜2　取組方法＞

（1）　外部講師を招聘し、将来の海外留学を目的とした「語学トレーニング講座」を実施する。
（2）　国際科２年生が小学校での英語授業を実施するほか、県内大学の留学生と交流する。
（3）　国際科１年生がニュージーランド研修にむけて異文化理解に努める。
（4）　教員が外部教育機関の教科指導力向上研修に参加し、指導力の向上をはかる。

＜3　成果指標と実績＞

成果指標	初期値	目標値	実績（評価）
①授業への取組２年	34%	36%	()
１年	38.3%	40%	()
①平日学習時間２年	1.8h	2h	()
１年	1.7h	2h	()
①休日学習時間２年	3.3h	3.8h	()
１年	3.1h	3.6h	()
③授業で力が　２年	8%	10%	()
ついた実感　１年	10.5%	12%	()
①外部検定受験者数	40/80 人	40/80 人	()
②海外研修参加者数	43 人	45 人	()
②Ｅ・Ｃ参加者数	80 人	80 人	()
③外部検定平均点	593/491 点	600/500 点	()
①平日英語学習時間	1h	1.2h	()
②校外学修満足度	100%	100%	()
③コンテスト参加者数	84 名	86 名	()
③英検準１級合格者数	３名	４名	()

「外部検定受験者数」と「外部検定平均点」は、左側がGTEC・右側がTOEIC

＜4　特徴的な取組＞

語学トレーニング講座

内　　容

＜１日目＞
①Writing【講義】
②Speaking【講義】
③Speaking/ Writing【演習】添削課題
④Writing/ Speaking【演習】添削課題

＜２日目＞
①Writing【振り返り講義】
②Speaking【振り返り講義】
③Speaking【演習】
④Speaking【演習】

生徒同士のペアワーク等でも、安易に日本語を使うことなく、しっかり英語で取り組む雰囲気があって良かった。

２日間すべてネイティブスピーカーの先生による英語の授業を経験し、話す力、書く力を伸ばす上で貴重な経験となった。

【徹底的にSpeakingを鍛える】

今まで、何か質問されたら答えとともに理由も言わないといけないと考え、それを意識するあまり理由を組み立てるのに時間がかかっていた。今回の講座で、リズムある会話を心がけることが大切だとわかった。

ボブ先生の“Bad English is better than no English.” “Keep it simple.”“Practice.”という教えに感銘を受けた。シンプルでも、とにかくdead air を作らずどんどん発信することが大切だとわかった。

オクトーバープロジェクト

＜１日目：広沢小学校訪問＞
①授業実習
＜２日目：大学訪問＞
①静岡大学浜松キャンパス
　留学生と自由討論
②静岡文化芸術大学
　音楽を通して異文化理解
＜３日目＞
　①日本の伝統文化理解（伊勢神宮）
＜４日目＞
　①世界諸地域の現状を知る
　　ジャイカプログラム
　②国際人としての自覚
　　NGO国際協力体験談とワークショップ

【広沢小学校で英語を楽しむ】

【留学生と交流】

【講義】

【ケチャ体験】

【伊勢神宮】

【JICA訪問】

＜５　成果と今後の方向性＞

○語学トレーニング講座
　１・２年生23名が参加して行われた。将来海外の大学に留学するにはどの程度のSpeaking,Writingの力が必要なのかを知ることができた。特に、感想の中にもあるとおり、Speakingの重要さを肌で感じることができたことは有意義であった。今夏、短期も含めて海外研修に出かけた生徒が17名ほどおり、大学進学後も含めて、海外へチャレンジする生徒が増えていくと思われる。
○オクトーバープロジェクト
　国際科生の異文化理解が深まったと思われる。今後も様々な異文化に触れることにより、その感性を磨き、国際人として世界で活躍する生徒が出てくることが期待される。

コアスクール（英語教育）　県立浜松湖南高等学校

平成30年10月

（平成30年5月指定）

＜1　テーマ＞

「教育改革」に対応した本校における英語教育充実方策について

＜2　取組方法＞

1　実施体制

学力向上研究委員会を設置し、教科横断的・効果的・組織的な指導方法を提案する。

2　生徒の学力向上への取組

(1) 英語科１年生サマーセミナーの拡充
(2) 英語科2年生海外語学研修の拡充
(3) 英国姉妹校との相互交流の拡充
(4) 生徒の英語４技能の向上
(5) 異文化理解に関する教育活動の拡大
　ア　近隣の外国人学校（ムンド・デ・アレグリア）との交流機会増大
　イ　英語科２年生が雄踏小学校訪問
　ウ　英語科２年生が県庁職員による静岡県の観光施策等についての講義を聴講

3　教員の資質向上

(1) 学力向上研究委員会や研修課を中心に公開授業や研究授業の充実
(2) 外部講師を招いた校内研修会（AL）実施
(3) 県内外の先進校視察や研修会参加

＜3　成果指標と実績＞

成果指標	初期値	目標値	実績（評価）
①授業への取組２年	31.7%	35.0%	()
１年	28.7%	30.0%	()
①平日学習時間２年	1.2H	1.4H	()
１年	1.0H	1.2H	()
①休日学習時間２年	1.8H	2.0H	()
１年	1.8H	2.0H	()
③授業で力が　２年	8.3%	10.0%	()
ついた実感　１年	7.7%	10.0%	()
①GTEC 受検者数	720 人	720 人	()
②英国姉妹校との相互交流参加生徒数	37 人（合算）	40 人	19人（B）
②サマーセミナー参加中学生数	50 人	45 人	45人（C）
③英語科３年生英検２級以上合格	40 人	40 人	37人（B）
②英語科２年生徒による小学校での英語授業回数	０回	１回	1回（A）
②外国人学校との交流回数	１回	２回	３回（A）
③普通科２年生 GTEC 得点率	62.9%	65%以上	()
②センター試験英語平均得点率	56.3%	60%以上	()

＜4　特徴的な取組＞

2-(1) サマーセミナー

県内のALT11名を招へいして市内のホテルで実施した。クイズ形式のレッスンに熱心に参加する中学生たち。
（H30.8.9～8.10）

2-(2) 海外語学研修（オーストラリア）

ホームステイしながら本校生徒向けに作成されたESLプログラムによる少人数授業を受けた。英語力が飛躍的に伸びる生徒も多い。
（H30.7.20～8.11）

2-(3) 姉妹校との相互交流

緊張するマッチングの瞬間（H30.10.22）

英国姉妹校（ヘンドン校）生徒19人が本校訪問。生徒宅にホームステイしながら学校生活や日本の文化を体験した。る。来年３月には本校生徒がヘンドン校訪問予定。
（H30.10.22～10.29）

長縄跳びに苦戦（H30.10.24）

PTA役員の協力で日本文化体験（H30.10.26）

2-(5) イ　雄踏小学校訪問

堂々としたTeachers（H30.10.18）

2-(5) ウ 県地域外交課による講話

未来の地域外交を担う（H30.10.19）

＜5　成果と今後の方向性＞

1　生徒の学力向上への取組

順調に充実した活動が行われている。特に、英語科2年生の小学校訪問は普段の授業の中では学べないことを自ら創意工夫しながら身に付けることができた。また、県地域外交課の講話聴講も英語を学ぶ大きな動機付けになった。単年度で終わらせることなく継続的に進めて行きたい。海外語学研修についても充実した事前・事後指導が行えたが、校内での一層の周知が課題である。3月に予定している英国姉妹校との交流には本校（英語科・普通科）20人が参加する予定である。生徒の4技能向上に向けては、英検の面接指導や大学のAO入試対策等で外部人材を確保することができたので、成果を期待している。

2　教員の資質向上

夏休み以降、学力向上研究委員会のメンバーが県内外（英語は東京都立両国高校・福井県立敦賀高校）の先進校を視察した。アクティブ・ラーニングに則った授業については、委員会内や教科内で情報を共有し、それをふまえて11月（授業公開週間）に校内での公開授業を設定している。また、12月5日には外部講師（茨城県立並木中等教育学校校長　中島博司氏）を招いて校内研修会を実施する予定である。

3　成果の検証

英国姉妹校生徒の歓迎会に学校評議員を招き、感想･意見等を伺うことができた。客観的な評価を礎に英語教育の拠点校として地域に貢献していきたい。

参考資料

コアスクール（進学重点、学力向上、学力進展）実施要項

１　趣旨

生徒の学力向上に向けては、次期学習指導要領等において、今後求められる資質・能力等がより明確化される一方で、高大接続改革において、「高等学校のための学びの基礎診断」及び「大学入学共通テスト」の導入が示されている。また、平成 27 年度から本県で実施している「高校生の自発的学習状況等に関するアンケート」の結果からは、家庭学習時間の不足など、課題が指摘されている。

これらを踏まえ、本事業は、知性を高める学習を充実することで、各高等学校の特色や現状に応じ、生徒の学力と教員の指導力の向上等を目的として、県立高等学校を「コアスクール（進学重点、学力向上、学力進展)」に指定するものである。

２　指定校

校長の申請に基づき、下記のとおり県教育委員会が採択する。

項目	採択数
進学重点	10 校程度
学力向上	10 校程度
学力進展	10 校程度

３　研究内容

指定校は、下記(1)～(7)について、学力向上のための効果的な取組を研究する。

(1) 実施体制（「コアスクール実施委員会」の設置など）

(2) 生徒の学力向上の取組

(3) 教員の指導力向上の取組

項目	(2)、(3)の取組（例）　【下記を参照して、学校が定める。】
進学重点	大学研究室における専門的研究、民間講師の招請、大学入学共通テストの研究
学力向上	大学教授による探究活動、地元自治体との地域学実践、授業改善（アクティブ・ラーニング)、大学入学共通テストの研究
学力進展	地元大学生等の外部人材を活用した学習会、資格試験の取得支援、基礎学力の定着に向けた研究

(4) 高大接続改革（大学入学共通テスト、高校生のための学びの基礎診断など）への対応

(5) 成果指標及び目標値の設定

以下の表に示した「指定の成果指標」に加えて、①生徒意欲・学習習慣、②実施状況、③達成成果について、「独自の成果指標」も設定し、各目標値を定める。

なお、「独自の成果指標」には、③達成成果を含めること。

項目	「指定の成果指標」
共通	①授業への取組　※１ ①平日学習時間　※１ ①休日学習時間　※１ ③授業で力がついた実感　※１

進学重点	①難関国公立大学の受験者数　※２ ②外部との連携による探究活動等への参加生徒数　※３ ②大学進学を目的とした補習等への参加生徒数　※４ ③難関国公立大学の合格者数　※２
学力向上	①国公立大学の受験者数 ②外部との連携による探究活動等への参加生徒数　※３ ②大学進学を目的とした補習等への参加生徒数　※４ ③国公立大学の合格者数
学力進展	①授業の理解度　※１ ②外部との連携による探究活動等への参加生徒数　※３ ②学力向上を目的とした補習等への参加生徒数　※４ ③第一志望の進路を実現した生徒数

※１　「高校生の自発的学習状況等に関するアンケート調査」による。

※２　旧帝大、東京工業大、一橋大、神戸大、医学部医学科とする。

※３　大学研究室における専門的研究、大学教授による探究活動、地元自治体との地域学実践等を含む。

※４　外部人材の活用を積極的に図る。

(6) 取組内容の保護者等への周知及び成果の検証方法

(7) その他、カリキュラム・マネジメントに資する目的のもと、指定校が必要と認める取組

４　研究期間

原則として、事業決定日（採択決定日）から平成33年３月末まで（３年間）とする。

５　留意事項

(1) 申請の際は、進学重点、学力向上及び学力進展のいずれか１つの項目を選ぶ。

(2) 平成 29 年度ネオアドバンススクール指定校においては、ネオアドバンススクールと本事業の両方への申請を認める。ただし、本事業に採択された場合は、ネオアドバンススクールの継続はできない。

(3) 国や県の事業で研究指定を受けている学校も申請できる。ただし、採択に当たっては令達額を考慮することがある。

(4) １校当たり、年間2,000千円を申請の上限とする。

(5) 予算の計上にあたっては、生徒の学力向上に向けた取組に連動した必要経費のみ計上する。高校教育課で取組内容を精査し、令達額を決定する。

(6) 予算の流用は、事業内容の変更理由等により必要性が認められない場合は、不可とすることがある。

(7) 次に掲げる経費については対象外とする。

・備品の購入

・施設の修繕や工事に要する経費

・教職員定数に影響する人件費

例：継続的に任用する、事務室補助員、教科補助員、部活動指導員等

・後年度負担を伴う事業計画（「学校経営予算」で対応可能なものを除く。）

６　計画書の提出

申請する学校は「コアスクール計画書」を提出する。

(1) 提出方法等

電子メールに添付して提出する。ただし、件名を「コアスクール（項目）」とし、ファイル名を「学校番号（半角）学校名（課程）（計画書（項目））」とする。

（例）下田高等学校全日制の場合：1下田（全）（計画書（進学重点））

提出先メールアドレス：kyoui_gako-tyousa@pref.shizuoka.lg.jp

(2) 提出期限

平成30年５月７日（月）

７　採択結果の通知

平成30年５月末を目途に通知する。

８　報告書等の提出

(1) 提出期限

提出物	提出期限
特徴的な取組等をまとめた資料	平成30年10月31日（水）
計画書（報告書）（平成30年度の実績を記入）	平成31年３月29日（金）
特徴的な取組や成果等をまとめた資料	平成32年３月31日（火）
計画書（報告書）（平成31年度までの実績を記入）	
特徴的な取組や成果等をまとめた資料	平成33年３月31日（水）
計画書（報告書）（平成32年度までの実績を記入）	

(2) 実績の評価基準

評価	基準
A	十分目標を達成することができた
B	おおむね目標を達成することができた
C	あまり目標を達成することができなかった
D	ほとんど目標を達成することができなかった

(3) 計画書（報告書）の作成

・具体的な取組内容や実績等を明確に記述する。

・年度ごとに加筆、修正を加えながら、最終的には平成32年度末に完成させる。

・別紙様式を用いて作成し、Ａ３用紙４枚程度にまとめる。

(4) 資料の作成

・カラー印刷の資料とし、高校教育課がまとめて冊子とする。全県立高等学校に配布するとともに行政資料等に使用するので、文字や背景色などの色を適宜工夫する。

・別紙様式を用いて作成し、Ａ４用紙２枚にまとめる。

コアスクール（英語教育）実施要項

１　趣　旨

現行の学習指導要領の趣旨に加えて、「大学入学共通テスト」への外部検定試験の導入など、英語教育において、４技能（読む・聞く･話す･書く）をバランスよく育成することが求められている。また、将来国際的分野で活躍する人材を育成するために、高校時代に海外派遣や異文化交流を経験する意義は大きい。

これらを踏まえ、本事業は、各高等学校の特色や現状に応じ、豊かな国際感覚とコミュニケーション能力を身に付けたグローバル人材の育成を目的として、県立高等学校を「コアスクール（英語教育）」に指定するものである。

２　指定校

校長の申請に基づき、下記のとおり県教育委員会が採択する。

項目	採択数
英語教育	５校程度

３　研究内容

指定校は、下記(1)～(7)について、学力向上のための効果的な取組を研究する。

(1) 実施体制（「コアスクール実施委員会」の設置など）

(2) 生徒の学力向上の取組

(3) 教員の指導力向上の取組

項目	(2)、(3)の取組（例）　【下記を参照して、学校が定める。】
英語教育	海外の高校とのオンライン交流、イングリッシュキャンプの実施、外部検定試験活用の研究

(4) 高大接続改革（大学入学共通テスト）への対応

(5) 成果指標及び目標値の設定

以下の表に示した「指定の成果指標」に加えて、①生徒意欲・学習習慣、②実施状況、③達成成果について、「独自の成果指標」も設定し、各目標値を定める。

なお、「独自の成果指標」には、③達成成果を含めること。

項目	「指定の成果指標」
英語教育	①授業への取組　※１ ①平日学習時間　※１ ①休日学習時間　※１ ①学校が指定する外部検定試験の受験者数　※２ ②海外研修（修学旅行は除く。）への参加者数　※３ ②イングリッシュキャンプへの参加者数　※４ ③授業で力がついた実感　※１ ③学校が指定する外部検定試験の合格者数　※２

※１　「高校生の自発的学習状況等に関するアンケート調査」による。

※２　実用技能英語検定２級など、英語の外部検定試験を学校が指定する。

※３　主催者を問わないが、観光目的のものは除く。

※４　学校が国内で実施する英語漬けの合宿等（宿泊しないものを含む。）。

(6) 取組内容の保護者等への周知及び成果の検証方法
(7) その他、海外からの高校生の受入、海外の高校生とのオンライン交流等の取組

４　研究期間

原則として、事業決定日（採択決定日）から平成33年３月末まで（３年間）とする。

５　留意事項

(1) コアスクール（進学重点、学力向上、学力進展）と本事業の両方への申請を認める。
(2) 平成 29 年度ネオアドバンススクール指定校においては、ネオアドバンススクールと本事業の両方への申請を認める。ただし、本事業に採択された場合は、ネオアドバンススクールの継続はできない。
(3) 国や県の事業で研究指定を受けている学校も申請できる。ただし、採択に当たっては令達額を考慮することがある。
(4) １校当たり、年間2,000千円を申請の上限とする。
(5) 予算の計上にあたっては、グローバル人材の育成に向けた取組に連動した必要経費のみ計上する。高校教育課で取組内容を精査し、令達額を決定する。
(6) 予算の流用は、事業内容の変更理由等により必要性が認められない場合は、不可とすることがある。
(7) 次に掲げる経費については対象外とする。
・備品の購入
・施設の修繕や工事に要する経費
・教職員定数に影響する人件費
例：継続的に任用する、事務室補助員、教科補助員、部活動指導員等
・後年度負担を伴う事業計画（「学校経営予算」で対応可能なものを除く。）

６　計画書の提出

申請する学校は「コアスクール計画書」を提出する。
(1) 提出方法等
電子メールに添付して提出する。ただし、件名を「コアスクール（英語教育）」とし、ファイル名を「学校番号（半角）学校名（課程）（計画書（英語教育））」とする。
（例）下田高等学校全日制の場合：1 下田（全）（計画書（英語教育））
提出先メールアドレス：kyoui_gako-tyousa@pref.shizuoka.lg.jp
(2) 提出期限
平成30年５月７日（月）

７　採択結果の通知

平成30年５月末を目途に通知する。

８　報告書等の提出

(1) 提出期限

提出物	提出期限
特徴的な取組等をまとめた資料	平成30年10月31日（水）
計画書（報告書）（平成30年度の実績を記入）	平成31年３月29日（金）
特徴的な取組や成果等をまとめた資料	平成32年３月31日（火）
計画書（報告書）（平成31年度までの実績を記入）	
特徴的な取組や成果等をまとめた資料	平成33年３月31日（水）
計画書（報告書）（平成32年度までの実績を記入）	

(2) 実績の評価基準

評価	基準
A	十分目標を達成することができた
B	おおむね目標を達成することができた
C	あまり目標を達成することができなかった
D	ほとんど目標を達成することができなかった

(3) 計画書（報告書）の作成

・具体的な取組内容や実績等を明確に記述する。

・年度ごとに加筆、修正を加えながら、最終的には平成 32 年度末に完成させる。

・別紙様式を用いて作成し、Ａ３用紙４枚程度にまとめる。

(4) 資料の作成

・カラー印刷の資料とし、高校教育課がまとめて冊子とする。全県立高等学校に配布するとともに行政資料等に使用するので、文字や背景色などの色を適宜工夫する。

・別紙様式を用いて作成し、Ａ４用紙２枚にまとめる。

平成 30 年度コアスクール報告書

作　成　平成 31 年１月 24 日

作成者　静岡県教育委員会高校教育課

事務局　静岡県教育委員会高校教育課指導第１班

〒420-8601　静岡市葵区追手町９番６号

TEL　054－221－3114

FAX　054－251－8685

Shizuoka Prefecture